
ちょっと変な恋話

tapi@shu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつと変な恋話

【Nコード】

N1687Q

【作者名】

tapi@shu

【あらすじ】

月村すずかには、自分にそっくりな双子の兄がいた。髪型、背格好、見た目というおおよその要素に限って言えば、彼・彼女をよく知る人物じゃなければ見分けがつかないほどだった。それは例え双子と言えども、男女と言う性別の絶対的な違いがある場合においては珍しいことだった。ある意味では、すでに特殊だったのかもしれない——という特殊な恋の話かもしれない……よ？

月村すずかには、自分にそっくりな双子の兄がいた。

髪型、背格好、見た目というおおよその要素に限って言えば、彼女をよく知る人物じゃなければ見分けがつかないほどだった。

それは例え双子と言えども、男女と言う性別の絶対的な違いがある場合においては珍しいことだった。ある意味では、すでに特殊だったのかもしれない。

しかし、すずかの兄——しずやは妹のすずかとは全く違う性格をしている。

すずかはそんな兄に対し、見た目は自分と一緒になのはどうしてこうも違うのかという、ちよつとした嫉妬みたいなものを抱えると同時に、尊敬や憧れを抱いていた。

普通は同じ環境で育った場合二人は似通った性格をするものであるが、双子ゆえ距離感が近かったためにそうはならなかった。

妹のすずかは、控えめな性格である。

その控えめな性格と言うのは、端から見ればお嬢様のような気品を纏い、とても優雅でおっとりとした雰囲気であると言えるのだろうが、それは幼少時に限って言えば、決していいこととは言えない。

控えめということとは、内気であり自分の意思をあまり持たない、と言う風に捕らわれがちなのである。

すずかはその事を自覚していた。

その幼い年齢にしては、あまりにも大人びた一面があるがゆえに理解していたのだ。

だから、自分が他の人にその性格のせいで苛めと同じような事をされたりするのは致し方ないこととして処理しようとしていた。

これは自分がしっかり言わないのが悪い、自分がもつとしっかりしないと……。

大人びていた為にそういった事をやけに冷静になって、自分が傷つきながらも我慢しようとしていた。

しかし、そんな時だった。

「あー、その君たち？」

「な……同じ顔のやつが二人！？ き、気持ち悪——ぶっ！」

「おやすみ」

彼がそういうと同時に放った拳で、すずかを苛めていた子は散り散りになり、逃げ帰って行った。彼はその様子をただ見て、その後すずかの手を優しく握った。怪我は無いかと聞きながら。

ありきたりな。それこそ王道と言えるほどの展開ではあるものの

この行為——妹の為に自分の力を躊躇無く振るえる兄が何人いようか？

そして、その妹を苛めた奴に打ち勝つ力を同時に持っている兄は何人いるのだろうか？

すずかの双子の兄であるしずやは、これまた妹と同じく年齢以上の力を持っていた。

その力は、単純な腕力でありスピードであり、すずかを守れる力だ。

すずかは自分が力を持っているのを知っている、しかし、それを使うのをよしとしない。それを使うともっと大変な目に会うと本能で悟っていたのかもしれない。もしくは純粹に、力を使いたくないと思っていたのかもしれない。

どちらにしろ、自分が苛められているにもかかわらず、黙ってそれを耐えていたすずかにとって、その兄の助太刀は、とても……とても嬉しいことだった。

「う……ん、大丈夫だよ。お兄ちゃん。ありがとう」

「そうか……じゃあ、帰るよ」

「うん！」

すずかは、この一件の前までは兄を軽く遠ざけていた。

自分と同じ姿をして同じ能力を持っているのに、やっていることが理解できない。ゆえに、怖いと言う感情があったのだ。

だが、この一件を境に考え、思いは一変した。そして、心のどこかで自分もお兄ちゃんのようになれるだろうか。

そんな事を思いながら、そっくりな双子は帰路を手をつなぎながら家へと帰っていった。

……………。

しずやがすずかとは真逆に近い性格になったのには理由がある。

その理由と言うのは、自分そっくりなくせに臆病で小心者で、自分の言いたいことも言えないような妹とは一緒にいたくなかったから。

この理由はなんとも子供っぽく、そしてそれが彼らしさの生まれだった。

もちろん、そんな妹に否定的な感情を抱いているのだが、逆に言うならばそれだけ妹の事を見てきた。

ただ見ているだけの行為は普通は苦痛でしかない。自分の嫌いな奴を観察し続けるということは苦痛以外の何者でも無いのではなからうか？

しかし、彼はそれが出来た。それはひとえに、妹の兄であるが故である。

否定的でいてしまうのは、彼が男の子であるがゆえであり、決して嫌っているわけではないのだ。心のどこかでは、妹を愛でる感情があるということだ。

いわゆる、好きな人にちよっかい出してしまう悪餓鬼のような気持ちということだ。

あたりまえのことだが、彼は妹と同じ幼稚園に通い、同じ小学校に上がる予定である。

そんなある日のことであつた。

昔からではあるが、妹が自分を少し遠ざけているのは分かつていた。そのため、幼稚園の行き帰りでさえ別々。

また休日遊ぶのも別々なことが多くなつた。

この日はたまたま、本当にたまたまずかと同じ公園に行き着いただけであつた。

そこで見たのは、すずかが苛められている様。

すずかはただその自分が苛められていると言つ状況を我慢しているように見えた。

すずかにだつて力があるんだからやり返せばいいのに。

彼はは真剣にそう思い見過ごそうとしていた。だけど、彼は結果的に妹のすずかを救つたのである。

なぜか？

すずかの涙が見えたから。

普段から大人しく、自分の感情さえもコントロールしようとする
すずかが泣いていると言う事実。

彼にとってその事実は驚愕に値するものであり、妹を助ける理由
には十分だった。

（普段からああやって素直になればいいのに）

兄である、しずやは妹の救援信号をしかと受け取り、助けに入る。

そして、その日。

彼は本当のすずかの兄になった。

.....

実はこの双子には一人の姉がいる。月村忍。

彼女は、自分の弟達より若干年が離れているが、実に上手くこの
二人と接していた。

弟にはお姉さんと言われ慕われ、妹にはお姉ちゃんと言われ親し
かった。

そんな彼女の心配事は一つあったのだが、それも知らぬ間に解決

し、自分が蚊帳の外だったのにちよつとショックを受けながらも、素直に喜んだ。

不仲だったあの二人がね。

彼女の目から見ても、明らかにあの双子の距離感がそれほど近いものではないのは分かっていた。だからこそ、長女である自分が何とかしなくては（と）獅子奮迅の心構えで計画を立てていた。

しかし、その計画は無意味に終わった。

月村家に勤めるメイドのノエルたちの報告によりそれを知ったからだ。

すずかに対する苛め。本来ならメイドであるノエル、またはファリンが止めるべきだったのだがその危機に一番に駆けつけたのが弟であり、すずかの兄であるしずやであった。

しずやは別に駆けつけたつもりは無かったのだが、本人を除いてその真意を知るものはいない。

まさに妹の為に、身体を張った救出劇。

兄妹愛。

その話をやや大げさに脚色しながら語るファリンの話と、真実をありのままに告げたノエルの話を聞きながら忍は涙を流した。

（お父さん、お母さん。私の弟達は無事に、健やかに育ってるわ）

まるで、亡き父と母に語るように胸中で呟いた。

すずかにはそれ以降にも、ちょっかいを出してくる輩は多かった。輩といっても同年代の子供なのだが。

その度にすずかは以前までとは違い、自分の意思をはっきり言うとうと努力するものの言えずじまいだった。

その代わり、彼女は涙を流した。

これは苛められたショックによるものなのか、自分の思った通りに思うようにならないことが原因なのかは、すずかでさえも分からない。

なんで……なんで、私には出来ないの。お兄ちゃんと言えるのに……。

（どうして……どうして！）

ジレンマだった。

何とか解決したい。自分で解決したいのに。それができない。自

分にはいい目標の兄がいるのに。

悔しい、と言う思いと同じように、別の感情も沸々と湧く。

ああ、やっぱりお兄ちゃんってすごいなあ。

ここでも出るのが憧れの感情。

こう思いながらも涙は流れている、だがこういうときには必ず現れる人がいた。

「おや、また会ったな」

「き、来たー！ に、逃げろー！」

「お、こら！ まて……はあ。さすが大丈夫か？」

「……うん。いつもありがとうね」

すずかは涙を拭いながらも、自分の兄に飛び切りの笑顔を向けて、お礼を言った。

今や通例のことなのだが、毎回のこういったすずかの笑顔に彼は、慌てる。

「あ、いや……あ、兄として当然のことだよ」

思わず出る一言。

思ってもいないことが言葉になって出たわけではないにしろ、自分で言つててちょっと恥ずかしくなった。そのせいか、顔が真っ赤になってしまう。

ドクン。すずかの胸がひとときわ鼓動を大きくした。

（ふふ、お兄ちゃん可愛いなあ。それにすごくカッコいいよ。でも、なんでだろう……私もなんだか顔が熱くなってきちゃったよお）

二人して顔を真っ赤にし始める。

その姿はやっぱり兄妹で、やっぱり双子でよく似ていた。

兄にとっては、すずかはただの妹でただの保護対象で、守ってやらないと男が——兄が廃ると思つての毎回の行動だ。

そして、彼にとってはそれ以上の意味は本当に無い。

だがまあ……笑っている妹は可愛いと言う、素直な男の子の気持が無いわけでもなかった。

そんな双子は同じ日、同じ時間に小学一年生になった。

ここで初めて兄妹が別のクラスへとなった。

しずやはその事を深く考えず、ああやっと別になったのか程度の

軽い気持ちしかなかったが、妹のすずかがそんなではすまなかった。

（お兄ちゃんとクラスが違……う？　　う、嘘。嘘だね？　な
んで、お兄ちゃんと一緒じゃないの！？）

彼女にとって友はしずや一人。彼女にとって最も親しきは兄一人。

姉がいるとも言えど、年の差は離れ、自分と同世代では兄一人。

すずかの心は激しく動揺した。

したのだが……それと同時に考えた。

（もしかしたら、お兄ちゃんに頼れなく（「な」）るときがきたのかもしれない。今度は私が、自分で本当に、頑張らなくちゃいけないのかも）

密かに決心をするすずかだった。

しかし、その決心と裏腹に、もし一人立ちできた自分を見た兄が自分の事を褒めてくれたらと考えると、胸が熱くなる思いだった。実際には顔はリングよりも赤くなり始めていた。

年を重ねると、幼いころは瓜二つだったすずかとその双子の兄すずやの容姿にも別々の特徴が現れ始める。当然のこと、二人はいく

ら双子とはいえ男と女という絶対的な性の差があるのだから。

それでも、やはりそこはかとなく似ていて、似せようとすればどこまでも似てくるということも（ ）であった。

すずかはそんなお互いの差が出てくるのを多少残念に思いながらもどこか嬉しかった。

兄と自分が似ている。それは嬉しい、でもそれ以上に自分は女で兄は男であるのが眼で見取れて、しかもにいていなければ、兄妹じゃなくてももしかしたら恋人同士に見えるかもしれないよね。

キヤーツ、なんていいながら顔を赤く染める始末である。

その様子をいぶかしんで見ていた親友のアリサが、すずかに大丈夫かと心配そうに聞くと、すずかは大丈夫、問題ないと答えた。

さすがに、自分が自身の兄に欲情し始めているなんて、知られるわけにはいかなかった。

そんな時だった、廊下をふと見るとそこで兄を姿を目撃する。楽しそうに男友達としゃべる兄の姿だ。

一瞬、心臓が跳ね上がり呼吸が荒くなりそうになるのを抑えながらも兄をジッと見つめる。

その姿はまるで恋する女の子のようだった。

（あ、お兄ちゃんだ。笑顔も可愛いなあ。でも……なんでだろう、あの笑顔が自分以外に向いてるのが、なんとなく）

嫌だな。

それはほんの気の迷いだったのかもしれないが、確かにすずかは一瞬兄と楽しそうに話をする友達に嫉妬をしたのだった。

（私のあの笑顔を……あ、そうだ！ いいこと思いついた）

すずかは閃いたことをすぐにその日に実行する事にした。

その日、すずやが家に帰ると先に家に帰っていたすずかが出迎えてくれた。

「おかえり、お兄ちゃん。荷物もつね」

「え？ あ、ありがとう」

（はて、おかしいな。今日はすずかは確か塾だったはずなのに）

すずやは疑問には思ったもののすずかのことから何かしらの都合があつて、帰ってきたのだらうと一人で勝手に納得した。

「ふふ、お兄ちゃんビックリしてる」

「ん？ 何か言った？」

「なーんも、だよ。お兄ちゃん好きだよ」

「え？　なんだよ急に。まあ、お、俺も好きだよ」

その様子をそつと影から見守る者がいた。

この双子の兄妹の姉の忍だった。

「二人ともかわあゝい！　ね、お姉ちゃんも混ぜ——ノエル止めないで！」

「忍お嬢様、どうか自重を……」

すずかの恋は前途多難だらけであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1687q/>

ちょっと変な恋話

2011年1月19日00時44分発行